

大阪市住吉区

山之内遺跡発掘調査報告

V

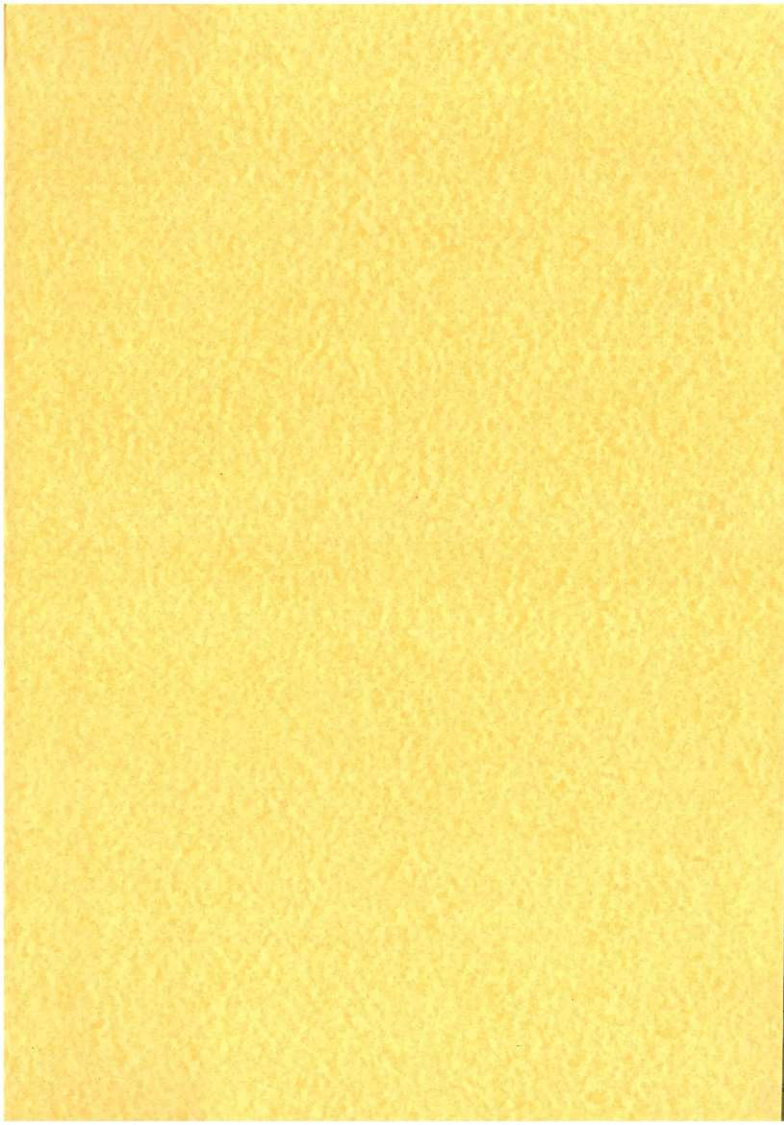
大阪市立大学理系学舎整備事業に伴う発掘調査報告書



2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

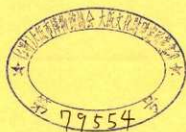


大阪市住吉区

山之内遺跡発掘調査報告

V

大阪市立大学理系学舎整備事業に伴う発掘調査報告書



2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所



共通教育棟調査地遠景(東区：南西から)

大阪市住吉区

山之内遺跡発掘調査報告

V

大阪市立大学理系学舎整備事業に伴う発掘調査報告書



2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序 文

本書は、2010年度に大阪市立大学の全学共通教育棟地区と理学部地区の2箇所において実施した発掘調査成果を報告するものである。当研究所が前身である財団法人大阪市文化財協会の頃から刊行してきた『山之内遺跡発掘調査報告』の5冊目に当たたる。

山之内遺跡は、市内を南北に貫く上町台地の上にあり、西隣の遠里小野遺跡とともに高燥で安定した土地であったことから、古くから各時代をとおして人が活動してきた場所である。調査が開始された頃は弥生～奈良時代の遺構・遺物が主として見つかったが、近年は中世後半の、河内(我孫子)鋳物師に係わるものが注目を集めている。

今回の調査でも中世後半の大溝や井戸が検出され、炉片などの金属加工に関連する遺物が出土した。鋤溝などの遺構から両調査区が中世後半から近代まで耕作地として利用されていたことは明らかであるが、中世後半においては鋳物師の集落が近辺にあった可能性が高い。こうした成果を今後の調査結果とともに検討することで、より具体的な歴史景観を復元できるものと考えられる。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、種々のご尽力をいただいた大阪市立大学をはじめとする関係諸機関に、心より御礼申し上げます。

2012年3月

財団法人大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所 長 長 山 雅 一

例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が2010年度に実施した山之内遺跡発掘調査(YM10-1次、YMは山之内遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と遺物整理、および報告書作成に係る費用は大阪市立大学が負担した。
- 一、発掘調査は財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所次長兼調査課長 南秀雄および同長原調査事務所長(当時) 佐藤隆の指揮のもと、同主任学芸員 松本啓子が行った。
- 一、本書の編集は東淀川調査事務所長 佐藤の指揮のもと、松本が行った。執筆は、第Ⅰ章と第Ⅲ章第1節を同学芸員 小倉徹也が松本と議論を重ねた上、行った。第Ⅱ章は佐藤が、それ以外を松本が分担した。
- 一、本書の用字・用語や体裁などの調整は、佐藤・小倉および同事業企画課長代理 清水和明による校正委員が行った。
- 一、基準点測量は、株式会社GIS関西に委託した。
- 一、遺構写真は松本が撮影し、遺物写真の撮影は写真補華堂 内田真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪文化財研究所が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学などの用語の中で、遺跡の地層に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。
2. 本書における遺構名の表記には、溝はSD、井戸はSE、土塹はSK、小穴はSP、その他のものはSXを冠している。遺構番号は遺構の種別に関係のない通し番号としている。
3. 本水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+〇m」と省略した。また、座標値は「測地成果2000」に基づく。図中の方位は図1が真北を基準に、それ以外は座標北を基準にしている。
4. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
5. 引用文献は巻末に示した。引用文献は本文中に[筆者または編集発行者 発行年]のかたちで表示するので巻末で検索されたい。

本文目次

序文

例言・凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地と歴史の変遷	1
1) 地理的環境	1
2) 歴史的環境と周辺の調査成果	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	7
第Ⅲ章 調査の結果	9
第1節 層序	9
第2節 理学部調査区の遺構と遺物	17
1) 中世後半の遺構と遺物	17
2) 中世末期～近世の遺構と遺物	17
3) 各層出土の遺物	19
i) 第3a層出土の遺物	
ii) 第1層出土の遺物	
4) まとめ	20
第3節 共通教育棟調査区の遺構と遺物	21
1) 中世後半の遺構と遺物	21
2) 中世末期～近世の遺構と遺物	24
3) 近世末期の遺構と遺物	25
4) 各層出土の遺物	28
i) 第4層出土の遺物	
ii) 第3層出土の遺物	
iii) 第2層出土の遺物	
5) まとめ	28
第Ⅳ章 今回の調査のまとめ	29
引用・参考文献	30

英文目次

原色図版目次

1 共通教育棟調査区の調査

- 上：東調査区 東壁断面(西から)
- 中：東調査区 中世後半の遺構(西から)
- 下：西調査区 中世後半の遺構(南西から)

図版目次

1 理学部調査区(一)

- 上：第5層上面全景(東から)
- 中：第5層上面全景(西から)
- 下：第5層上面の遺構(東から・東半)

2 理学部調査区(二)

- 上：東壁断面(西から)
- 中：東壁断面(北から)
- 下：深掘り断面(北から)

3 理学部調査区(三)

- 上：第5層上面の遺構(西から・西半)
- 中：第5層上面の動痕跡と足跡(南から)
- 下：第5層上面の隅隅目の足跡

4 理学部調査区(四)

- 上：第3層上面の遺構(北から・西半)
- 中：SK202(北から)
- 下：SK201(北から)

5 共通教育棟調査区(一)

- 上：西調査区 第3層と第4層の遺構(北から)
- 中：西調査区 SE302断面(東から：上部)
- 下：西調査区 SE302断面(東から：下部)

6 共通教育棟調査区(二)

- 上：西調査区 SE301(東から)
- 中：西調査区 SE301五輪塔49出土状況(東から)
- 下：西調査区 SE301五輪塔48出土状況(東から)

7 共通教育棟調査区(三)

- 上：東調査区 大溝(北西から)
- 中：東調査区 大溝断面(南東から)
- 下：東調査区 南壁にかかる大溝(北西から)

8 共通教育棟調査区(四)

- 上：西調査区 大溝・井戸検出状況(北から)
- 中：西調査区 大溝断面(東から)
- 下：西調査区 大溝と井戸(北から)

9 共通教育棟調査区(五)

- 上：西調査区 大溝の底に残る足跡(西から)
- 中：西調査区 墨痕跡(北から)
- 下：西調査区 SP401(東から)

10 共通教育棟調査区(六)

- 上：東調査区 第3層上面全景(西から)
- 中：西調査区 第3層上面全景(北から)
- 下：東調査区 第2層上面全景(西から)

11 共通教育棟調査区 出土遺物

12 調査区 出土遺物

挿 図 目 次

図 1	山之内遺跡の位置	1	図 12	本調査地と周辺調査地の地層の対比	15
図 2	山之内遺跡と周辺の遺跡分布図	2	図 13	理学部遺構平面図	18
図 3	遺跡の立地と周辺の地形分類	2	図 14	理学部遺構断面図	19
図 4	調査地周辺の既往の調査	3	図 15	理学部地区出土遺物	20
図 5	理学部調査区配置図	7	図 16	共通教育棟調査区中世後半の遺構	21
図 6	共通教育棟調査区配置図	8	図 17	共通教育棟調査区遺構断面図	22
図 7	地層と遺構の関係図	9	図 18	共通教育棟調査区中世末～近世の遺構	24
図 8	理学部調査区 東壁・南壁地層断面図	10	図 19	共通教育棟調査区近世末期の遺構	25
図 9	共通教育棟東調査区 南壁地層断面図	12	図 20	共通教育棟調査区出土遺物 (1)	26
図 10	共通教育棟東調査区 東壁・西壁地層断面図	13	図 21	共通教育棟調査区出土遺物 (2)	27
図 11	共通教育棟西調査区 西壁・東壁・南壁地層断面図	14			

表 目 次

表 1	大阪市立大学構内およびその周辺のおもな遺構・遺物	4	表 2	その他周辺の遺構・遺物	5
-----	--------------------------	---	-----	-------------	---

写 真 目 次

写真 1	理学部調査区の作業開始状況	8	写真 2	共通教育棟調査区の段丘構成層調査状況	8
------	---------------	---	------	--------------------	---

第I章 遺跡の立地と歴史の変遷

1) 地理的環境

山之内遺跡は大阪市住吉区の東南部、山之内・山之内元町・杉本・浅香にまたがる東西1.4km、南北1.5kmの範囲が埋蔵文化財の包蔵地に指定されている。遺跡の西側は遠里小野遺跡、東側は依羅池跡や苅田9丁目所在遺跡、北側は我孫子城跡伝承地と接している(図1・2)。

本遺跡は東の河内平野(河内低地)と西大阪平野(大阪海岸平野)を分けて、ほぼ南北に延びる上町台地の南部に位置している(図1・3)。上町台地は大阪城付近を北限とし、大阪市南方に至る南北10km余り、東西幅2～3kmの中位・低位段丘である。その台地面は大阪城から天王寺にかけてはTP+25～15m、天王寺より南ではやや高度を下げてTP+15～10mとなり、大和川以南では徐々に高度を上げて泉北台地に連なる。台地西側は急傾斜で落ち、あるいは崖を成し、西大阪平野と埋立地を経て大阪湾に至るが、東側は緩やかに傾斜して河内平野に没する。大局的には北から南へ、西から東へ傾斜する地形を呈している。今回の調査地は台地の稜線からは東寄りに位置し、現地表の標高はTP+11m前後である。

2) 歴史的環境と周辺の調査成果

以下に、本遺跡を各時代・時期ごとに概観する。調査成果については表1・2を参照されたい。

中期旧石器時代ではYM91～12次およびYM92～9・93～12次調査でナウマンゾウとヤベオオツノジカの足跡化石が検出されているが、人類の痕跡はまだ発見されていない[大阪市文化財協会1998]。

後期旧石器時代ではYM94～26次調査でサヌカイト製剥片が平安神宮火山灰層(始良-Tn火山灰:AT)の



図1 山之内遺跡の位置。



図2 山之内遺跡と周辺の遺跡分布図

(遺跡範囲は大府地図情報システム上の「文化財情報」【大阪府教育委員会2007】から作成)

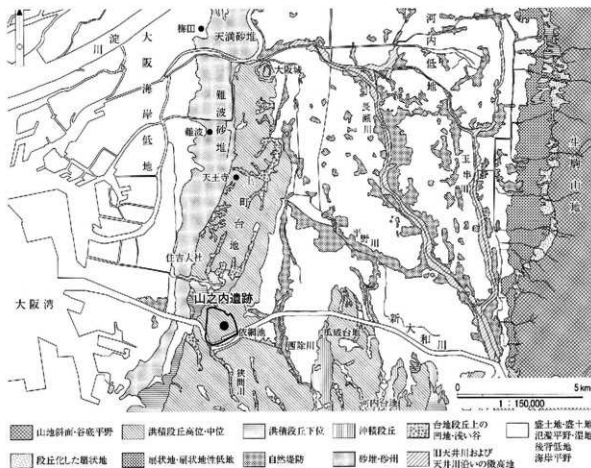


図3 遺跡の立地と周辺の地形分類(土地条件図【建設省国土地理院1965】に一部加筆)

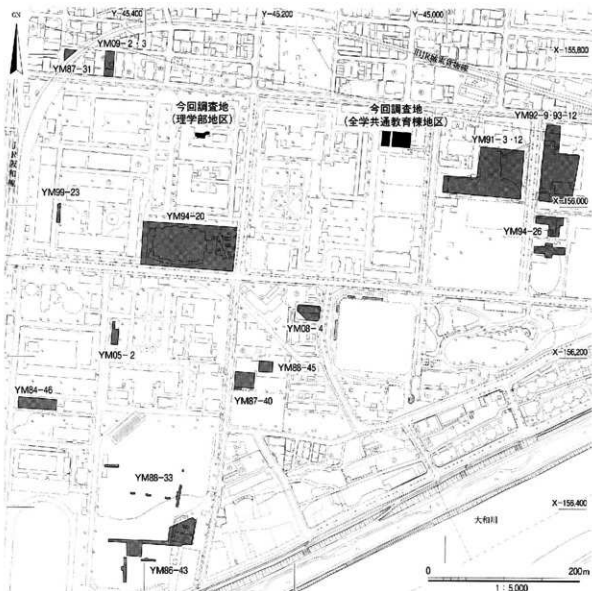


図4 調査地周辺の既往の調査

下位層から発見されている。また、YM83-18次調査では、後世の遺構からではあるがナイフ形石器が出土している[大阪市文化財協会1998]。

縄文時代では前期にさかのぼる爪形文を施した土器片や、晩期の滋賀里Ⅲa式土器・突帯文土器・石鏃が見つかっている[大阪市文化財協会1998]。

本遺跡が大きく変化するのは弥生時代になってからである。西部において前期末から中期後葉にかけての土器・打製石器・磨製石器などをはじめ、堅穴建物44棟、掘立柱建物・土壇・柱穴群・溝などの集落遺構が南北約300m、東西約100mの範囲で確認されており、上町台地南部における弥生時代中期後葉にピークを迎える拠点集落として注目されている[大阪市文化財協会1998・1999]。南部にある大阪市立大学のグラウンドで実施したYM86-43・88-33次調査では前期末から中期中葉にかけての方形周溝墓群をはじめ、中期中葉の土器棺墓が検出されている[大阪市文化財協会1998]。後期前葉を迎える頃に一旦集落が廃絶し、その後、再度集落が営まれるのは古墳時代中期後葉(5世紀後葉)

表1 大阪市立大学構内およびその周辺のおもな遺構・遺物〔大阪市文化財協会1998〕から作成)

次数	84 - 46	86 - 43	87 - 40	88 - 33	88 - 45	91 - 12	92 - 9・ 93 - 12	94 - 20	94 - 26
旧石器 遺構						足跡・立木 化石 黒曜石ほか	足跡 石器遺物		石器遺物
縄文 遺構 遺物						石廬	石廬ほか		石廬ほか
弥生 遺構		方形副溝墓 17・土器埴 1		方形副溝墓2		土廬1			
遺物	弥生土器・石 廬ほか	弥生土器・ 石器	弥生土器	弥生土器・ 石器		弥生土器・ 石器	石廬・石廬 ほか		
古墳 遺構			溝1・土廬2						
遺物	土師器・須 恵器		土師器・須 恵器・韓式 系土器・土 埴・埴輪?		土師器・須 恵器・土埴				
飛鳥 遺構	井戸1・掘立 柱建物2・溝 7・土廬4	溝2							
遺物	土師器・須 恵器・土埴・ 埴輪	土師器・須 恵器・土埴							
奈良 遺構 遺物									
平安 遺構 遺物	溝2 瓦器・瓦質 土器・白磁・ 支脚								
鎌倉 遺構 遺物									
室町 遺構 遺物	土埴1 白磁				溝1 陶器・瓦・ お燈・磁滓				
江戸 遺構 遺物		溝1 陶磁器							
備考	池・時跡不 明溝1・土埴		性格不明溝・ 土埴多数あ り		性格不明土 埴			地質断面 調査	

になってからである。

古墳時代では、5世紀後葉～6世紀末葉の集落遺構が南部を中心に検出されており、堅穴建物が6棟確認されている。この中で、5世紀後葉に営まれた堅穴建物の付近では鉄滓や鑢羽口を伴う鍛冶工房とみられる遺構が伴っていたほか、YM86-18・86-42次調査では同方位の堅穴建物が2棟並んで建っていた〔大阪市文化財協会1998〕。また、YM83-18次調査では軟質の韓式系土器や宇多型壺などが出土しており、これらは本遺跡の集団が朝鮮半島の南部地域や東海地方など遠距離にある集団とも交易や交流を行っていたことを示唆している〔大阪市文化財協会1998〕。

飛鳥～奈良時代の集落は、山之内遺跡の西部を中心に分布していることが明らかになっている。掘立柱建物の方位は北で東に振るものもあるが、南北に近いものと、北で西に振るものが多いのである。掘立柱建物で時期が確認されている建物の方位は、YM84-46次調査の奈良時代の掘立柱建物のように正南北から大きく振れるものもあることから断定しがたいが、飛鳥時代末葉～奈良時代に属するものは正方位に近いものが増える傾向にあるという〔大阪市文化財協会1999〕。

中世になると東北部および南部で鋳物師関連の鉄滓や埴片、鋳型の破片をはじめ、多量の焼土や木炭などの出土が目立って増加する。特に北部の杉本町二丁目付近ではYM87-31・90-27・91-8・92-8・08-2次調査などで、13～15世紀代の瓦器や瓦質土器、甗の一部とみられる破片、鋳型の

代の集落の一面に当る可能性が高いことが指摘されている。

江戸時代以降は調査地域の大半が田圃地帯であったことが、これまでの調査によって明らかになっている。1704(宝永元)年には本遺跡南部に大和川が開削される。大和川が大きく北に湾曲する現在のJR阪和線浅香駅付近は「浅香の千両曲り」ともいわれ、大和川の付替え工事の継所であったと伝えている[中九兵衛2004]。

これらの調査に加え、大阪市立大学構内の調査としては、YM90-20・99-23・05-2次調査があり、YM90-20次調査では低～高位段丘構成層の間にゾウの足跡状の窪みのある古地表面を複数確認された[大阪市文化財協会1998]。YM99-23次調査では室町時代の井戸・土塋や鍛冶滓などが、また、YM05-2次調査では江戸時代の粘土取穴と古代の土塋・溝などの遺構が検出され、これまでの調査成果を補完する資料となっている[大阪市文化財協会2002、大阪市教育局・大阪市文化財協会2006]。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

前章で述べたとおり、山之内遺跡は旧石器時代～江戸時代の遺構・遺物を包蔵する複合遺跡であり、現在は、東西1.4km、南北1.5kmの範囲が埋蔵文化財包蔵地として周知されている。そのうち、大阪市立大学構内は遺跡の中央から南にかけての部分に当たる。特に南半部では、弥生時代中期の方形周溝墓群や、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・井戸・溝といった遺構が検出されている。本大学の東隣の街区では、後期旧石器時代のサヌカイト製剥片や中期旧石器時代のナウマンゾウやヤベオオツノジカの足跡などが見つかっている。また、旧JR城東貨物線より北側の遺跡北半部では、鋳造炉や井戸、鋳型や埴壇、鉋滓といった中世の鋳造関連の資料が見つかっている。これらは中世に活躍した河内鋳物師に関連する資料として注目されるものである。

今回の2箇所の調査地は、ともに旧JR城東貨物線近くの遺跡東半部の北寄りに位置しており、各時代の遺構・遺物分布域の縁辺部にあたることから、こうした遺構・遺物の検出・出土が予想された。このたび、本大学において理系学舎整備事業に伴う建設工事が計画されたため、大阪市教育委員会によって事前の試掘調査が行われた。その結果、理学部地区では地表下約1.3m以下で、また、全学共通教育棟地区では地表下約1.1m以下で、発掘調査の対象となる遺物包含層・遺構面が認められた。この結果をうけて、大阪市教育委員会は大阪市立大学および関係諸機関と協議を行い、財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託して本調査を実施することとなった。

調査は平成22年5月29日より開始した。まず、理学部地区においては、中庭の通路部分に約100m²の範囲の調査区を設定し(図5)、試掘結果に基づいて地表から1.5mまでの深さを重機で掘削し、以下を人力によって地表下2.3mまでの間を調査した(図版2)。検出した遺構や地層は図面・写真などで記録しつつ、慎重に掘り下げた。同年6月12日にこれらの作業を終えて埋戻しを行い、6月14日に理学部における現地調査を完了した。

理学部地区の調査と並行して、6月1日から全学共通教育棟地区の調査を行った(以下、共通教育棟調査区と呼称する)。



図5 理学部調査区配置図



図6 共通教育棟調査区配置図

地表下約8mまで掘り下げ、旧石器時代に関わる遺構や遺物、火山灰の降灰痕跡、動物の足跡化石などの有無を観察し、記録を行った。同年8月27日に現地における調査を終え、埋戻しと機材などの撤収を行い、9月2日にすべての作業を完了した。

なお、本調査地の基準点測量は6月25日と7月15日に行っている。

報告書の作成に関しては、2010年6月から実施した。現地で記録した図面・写真の整理を行うとともに、遺物の洗浄・復元、実測を行った。これらをもとにパーソナルコンピュータを使用して作図・編集を行った。こうした作業と並行して原稿を執筆し、レイアウト完成済みのデジタルデータを本大学に納品して作業を終了した。



写真1 理学部調査区の作業開始状況



写真2 共通教育棟調査区の段丘構成層調査状況

第三章 調査の結果

第1節 層序

部分的な坪掘りを含めて、共通教育棟調査区では現地表下約5.8m (TP+5.3m)まで、理学部調査区では現地表下約3.5m (TP+8.1m)までの地層を観察した。本調査地の層序は基本的には共通教育棟調査区での観察結果に基づいて組み立てた(図7)。以下に各層の層相やその特徴を記し、地層と遺構の関係を図7に、地層断面図を図8～11に示す。

第0層：現代の盛土層および攪乱層である。層厚は75～150cmで、深いところでは200cmを越えていた。

第1層：近代以降の盛土層および作土層である。第1a層と第1b層に区分した。両層を合わせた層厚は20～40cmである。

第1a層：オリブ褐色(2.5Y4/4)の礫質砂ないし、礫質砂からなる盛土層で、共通教育棟調査区にのみ分布していた。

第1b層：黒色(2.5Y2/1)の砂質粘土からなる作土層で、理学部調査区にのみ分布していた。

第2層：第2a層と第2b層に区分し、さらに第2a層を第2ai層と第2aii層に、第2b層を第2bi層と第2bii層に細分した。共通教育棟調査区にのみ分布し、理学部調査区では攪乱によって削剥されていた。

第2ai層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトからなる後述する里道とみられる盛土層で、砂と礫を含む。

第2aii層：近世の作土層で、黄灰色(2.5Y4/1)ないし暗灰黄色(2.5Y5/2)、暗オリーブ色(5Y4/3)の砂質シルト～粘土質シルトからなる。第2ai層と第2aii層を合わせた層厚は20～30cmである。

第2bi層：近世の作土層で、暗灰黄色(2.5Y5/2)ないしオリブ褐色(2.5Y4/3)の粘土質シルト～粘土からなる。層厚は20cm以下である。

第2bii層：溝の埋土で、細粒砂を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)の粘土質シルトからなる。

第2a層上面で畝の畝・畝間とこれを斜めに横切る里道の盛土、下面で耕作溝群を検出した。また、第2b層上面で畝の畝・畝間を、下面で耕作溝群を検出した。第2b層上面の畝の畝・畝間は第2a層のも

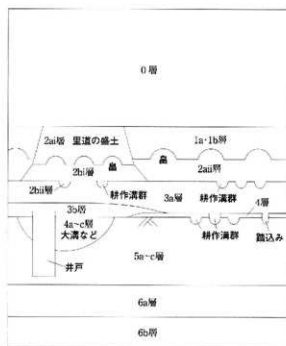
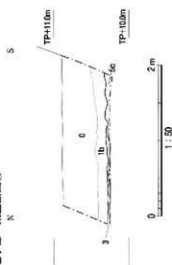
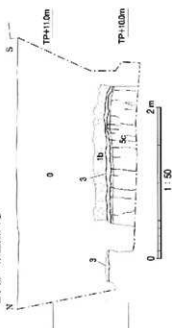


図7 地層と遺構の関係図

理学部 東壁断面①



理学部 東壁断面②



理学部 南壁断面

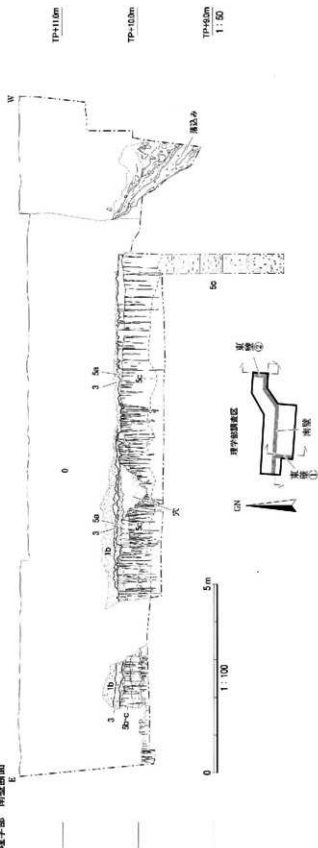


図8 理学部調査区 東壁・南壁地層断面図

のとは異なり、第2a層上面の里道の盛土と同じ方向であった。

第3層：中世の作土層で、第3a層と第3b層に区分した。

第3a層：黄褐色(2.5Y5/3)ないしオリブ褐色(2.5Y4/3)、黒褐色(2.5Y3/2)のシルト質粘土からなり、細粒砂・炭・焼土を含む。層厚は10～30cmである。共通教育棟・理学部の両調査区に分布していた。

第3b層：褐色(10YR4/6)の砂質シルトからなり、層厚は15cmである。共通教育棟調査区の一部にのみ分布していた。

第3a層下面で耕作溝群とこれに平行して並ぶ偶蹄類の足跡を検出した。耕作溝群は東西方向のものと北西－南東方向のものがあった。また、共通教育棟西調査区では井戸2基が検出され、うち1基から五輪塔48・49が出土した。

第4層：主として共通教育棟調査区で散見された地層で、溝の埋土でよく残っていた。黒褐色(10YR3/2)ないしにぶい黄褐色(10YR4/3)の粘土～シルト質粘土からなり、炭や焼土を含む。層厚は20cm以下で、最大約50cmである。大溝では第4a～4c層に区分した。

第4a層：黄灰褐色(10YR4/2)ないしにぶい黄褐色(10YR5/4)のシルト質粘土からなり、炭や焼土を含む。

第4b層：にぶい黄褐色(10YR5/3)の粘土質シルトからなり、下位の第5層の偽礫・炭を含む。

第4c層：灰黄褐色(10YR6/2)ないしにぶい黄褐色(10YR4/3)の粘土質シルト～粘土からなり、下位の第5層の偽礫を含む。

土師器・須臾器などの古代の遺物とともに中世の瓦器や金属加工関連遺物が出土した。

第5層：河成層で第5a～5d層に区分した。

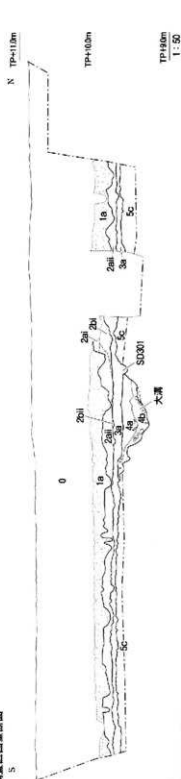
第5a層：黄灰色(2.5Y6/1)のシルト質粘土からなり、層厚は25cm以下である。風化が著しく、上面には乾痕が発達していた。

第5b層：オリブ褐色(2.5Y4/3)ないし黄灰色(2.5Y6/1)の粘土質シルトからなる。共通教育棟調査区では暗色帯を上部と中部に挟んでいた。なお、理学部調査区では本層準と下位の第5c層とを明瞭に区分することができなかった。層厚は30cm以下である。理学部調査区の南壁断面において、倒木痕とみられる穴を確認した。碗がけから、最上部付近では褐色の扁平型ガラスを含み、上部から中部付近では火山ガラスに加えて角閃石が、下部では無色透明の扁平型ガラスが目立って含まれていた。

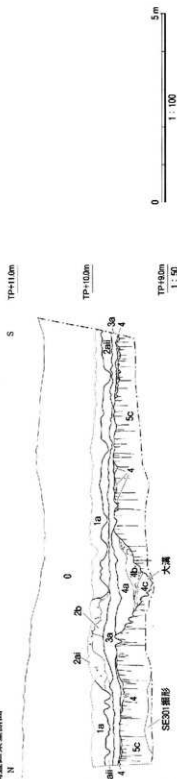
第5c層：最上部は極細粒～細粒砂を含む灰色ないし暗灰色の粘土質シルトからなり、やや暗色化していた。上部は灰白色(2.5Y7/1)ないし黄灰色(2.5Y6/2)の極細粒～細粒砂混り粘土質シルト、黄灰色(2.5Y5/2)の極細粒～細粒砂質シルトからなり、下部は灰オリブ色(5Y6/2)の粗粒砂～細礫混りシルト質細粒～中粒砂からなる。下部から上部にかけて上方細粒化していた。層厚は20～90cmである。碗がけから、最上部には火山ガラスなどの火山灰を起源とする火砕物は含まれなかった。

第5d層：最上部は緑灰色(10GY6/1)シルトからなり、上部はオリブ灰色(5GY6/1)ないし灰色(10Y6/1)粗粒砂～細礫混り細粒～中粒砂質シルト、下部は灰色(10Y6/1)中粒砂～細礫からなる河成層である。下部から上部に上方細粒化が認められ、下部にはトラフ型斜交リミナが発達していた。下

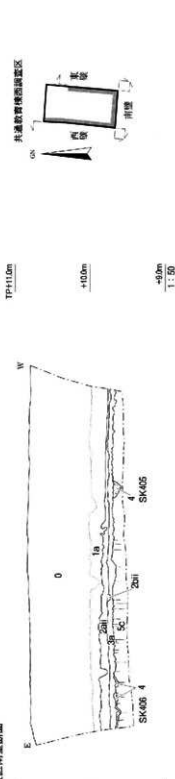
共通教育棟 西調査区西壁断面



共通教育棟 西調査区東壁断面



共通教育棟 西調査区南壁断面



共通教育棟西調査区 西壁・東壁・南壁地層断面図

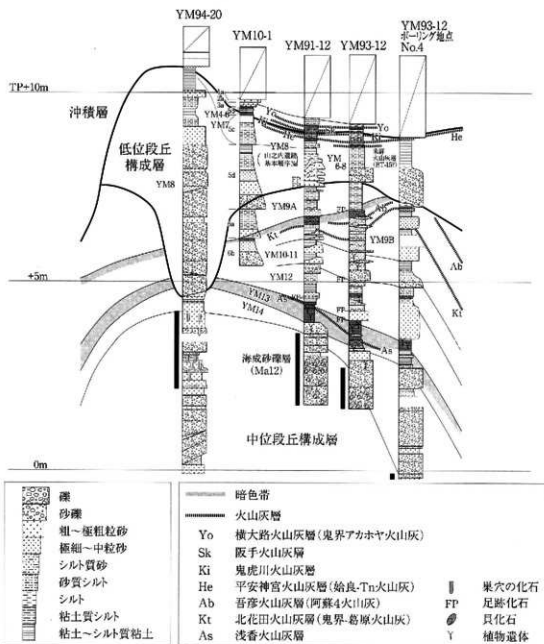


図12 本調査地と周辺調査地の地層の対比〔大阪市文化財協会1998〕の図388(註1)を加工して引用
(註1)山之内遺跡発掘調査報告 p.470 〔各地点の地質柱状図と地層の対比(趙智清編)〕

半部の層厚は約170cmである。

第6層：河成層および暗色帯構成層で、第6a層と第6b層に区分した。

第6a層：上部は緑灰色(5G5/1)の細粒砂質シルトから粗粒～中粒砂からなり、下部は緑灰色(5G5/1)の極細粒～細粒砂質シルトからなる河成層である。層厚は約85cmである。

第6b層：最上部が黄灰色(2.5Y4/1)ないし緑灰色(10GY6/1)の極細粒～細粒砂質シルトからなる暗色帯、上部はシルトを含むオリーブ灰色(2.5GY6/1)・緑灰色(7/5GY6/1)の細粒～粗粒砂、下部は緑灰色(10GY5/1)の粗粒砂～中礫からなる河成層である。層厚は65cm以上である。礫がけから、最上部の暗色帯には角閃石が含まれていた。

本調査地周辺ではYM91-12次・92-9・93-12次・94-20次調査[大阪市文化財協会1998]で火山灰分析が行われ、地層の対比がなされている。そこで本調査地の層序を対比すると、図12のようになる。すなわち、第5c層が山之内基本層序のYM8層に、第6a層がYM9A層に、第6b層がYM9B層にそれぞれ対比できる。以上の対比から、第5b層は沖積層中部～低位段丘構成層最上部付近に相当するものと考えられ、第5c層は低位段丘構成層上部～下部に相当すると考えられる。また、第6a・b層は中位段丘構成層上部に相当すると考えられる。

第2節 理学部調査区の遺構と遺物

1) 中世後半の遺構と遺物(図13～15、図版1～4・11)

第5層上面で中世後半(室町時代)の遺構が見つかった。耕作に係る鋤溝SD402・404・406～408や土壌SK403・405、小穴、足跡などである。これらの遺構は埋土や出土遺物から第4層の遺構と考えられるが、調査区全体が第3層準の耕作により攪乱されているので、あまり残りは良くない。遺構はおもに調査区の東側で確認された。

以下におもな第4層の遺構について記述する。

土壌は調査区東半で2個見つかった。東側にあるSK403は、東西約0.6m、南北0.4m以上、深さ16cmの規模のもので、図14の断面図に示したように、埋土は暗灰黄色粘土質シルトで、第5層の偽礫と炭・砂・礫を含む。西側にあるSK405は、東西約0.5m、南北0.4m以上、深さ3cmの浅い土壌で、SK403と同様の埋土をもつ。

遺物は、SK403から土師器や須恵器、鉾澤が出土した。SK405からは土師器と轆の羽口が出土した。いずれも細片であるが、SK403出土の須恵器こね鉢5を図15に示した。中世後半のものとみられ、これら土壌の時期を示す。

SD402・404・406・407は調査地東部の鋤溝で、SD408は調査区西部の鋤溝である。いずれもほぼ南北方向で、深さ5cm程度の浅い溝である。幅はSD402が約0.3m、SD404が0.7～1.0m、SD406が0.4～0.5m、SD407が0.1～0.4mである。SD408は残りが悪く、幅は最大でも0.1mほどしかなく、深さも最深3cmと浅い。埋土はどの溝もよく似ていて、砂を含む黄灰褐色粘土質シルトである。

また、調査区西半部では鋤の掘削単位とみられる東西約20cm、南北約5cmの掘込み痕跡が、南北に列をなして残っていた(SX401)。おそらくこれも鋤溝の痕跡であろう。

先にも述べたとおり、第3層準の耕作によって攪乱されているので、本来、鋤溝は調査区全体にあったものとみられ、やや深く残ったものだけが検出されたものと考えられる。

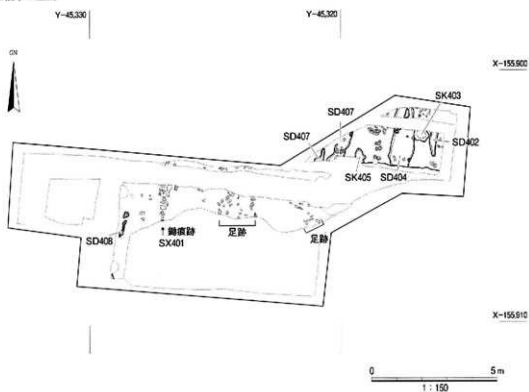
これらの鋤溝から土師器・須恵器といった古代の土器片とともに中世後半(室町時代)の瓦器片や鉾澤が出土した。図15に示した土師器皿1はSD408から出土した、いわゆる「て」の字皿で、この付近に第4層よりも古い中世前半(平安時代)の遺跡の存在を窺わせる資料である。

また、長さ10cm程度で爪先が二股に分かれた偶蹄類とみられる足跡が検出された。足跡の大きさから勘案して、ウシのものとみられる。調査区中央部や東半部に多く残っていたが、特に中央部では、足跡は東西約1.5mの幅で密集して南北の帯状に残っており、鋤溝の方向とほぼ一致する。耕作にウシを利用し、おそらくこの部分が通路のようなものであったのだろう。足跡は鋤溝と同じ砂を含む黄灰褐色粘土質シルトで埋まっており、埋土から轆の羽口とみられる小さな破片が出土した。

2) 中世末期～近世の遺構と遺物

第3層上面で鋤溝と土壌を検出した。これらの遺構の埋土は、第3層や第3層の直上を覆う第1層

中世後半の遺構



中世末期～近世の遺構

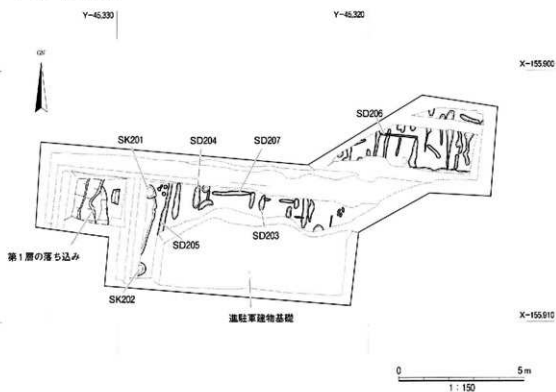


図13 理学部遺構平面図

と異なる。また、共通教育棟地区の両調査区に分布し、本調査区では見られない第2層とも若干異なるので、第2層下面の遺構か第3層上面の遺構かは判断としない。したがって遺物の示す時期でこれらの遺構の帰属を判断するはかないのだが、遺物においても近世後半や近世末期まで下がると判断できるものは出土していない。ゆえに、ここでは第2層下面の遺構番号を示す200番台の遺構番号を付して報告する。

調査区全域で多数の鋤溝を検出した。鋤溝は東西方向のものや南北方向のものがあり、東西の鋤溝が南北の鋤溝よりも後に掘られている。

SD203～205のような南北方向の鋤溝は、幅が0.1～0.3m、深くても5cm程度のものが大半であるが、SD205だけはやや規模が大きく、幅は0.4m以上、深さは10cmである。これらの鋤溝の埋土は灰褐色粘土質シルトで、砂や礫が混じる。

SD206・207のような東西方向の鋤溝は、上部をかなり削り取られているため、幅約0.1m、深さ2～3cmほどしか残っていない。埋土は、後述の土壌SK201とよく似ており、炭や砂を含む黄褐色粘土質シルト～シルトである。

遺物は南北方向のSD203から土師質の甕の破片が出土し、SD204から土師器と鉄の板の破片が出土したのみで、他の鋤溝からの出土遺物はない。

土壌は調査区の西半部で2個見つかった。北側にあるSK201は東西0.4m以上、南北約0.5m、深さ18cmで、埋土は図14の断面図に示したとおり、炭や砂を含む黄褐色粘土質シルト～シルトで、第3a層の偽礫を含む。SK202は東西0.3m以上、南北約0.7m、深さは16cmである。埋土は炭や砂の混じるオリブ褐色粘土質シルト～シルトで、SK201同様に第3a層の偽礫を含む。遺物はSK201から土師器が出土したが、細片のため、図化し得なかった。

また第3層上面の遺構ではないが、第1層上面の落込みが調査区西端で見つかった。深さが1.2m以上あるもので、周辺にあったとみられる地層が塊の状態で投入されていた。この落込みからは土師器の皿・甕といった古代の遺物や、中世の鎚連弁文の青磁片3、近世後半の肥前磁器小杯4などが出土した。これらから、本調査区周辺の失われた地層のようすを窺い知ることができる。

3) 各層出土の遺物

理学部調査区では、第1層と第3a層が分布するが、両層とも遺物が少なく、あっても破片が多い。



図14 理学部遺構断面図

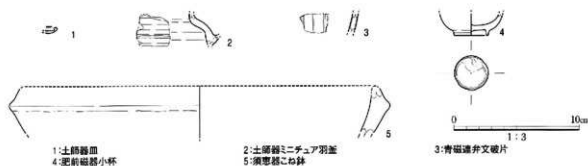


図15 理学部地区出土遺物

SK403(5)、SD408(1)、第1層落ちこみ(3・4)、第1層(2)

i) 第3a層出土の遺物

本調査区の第3a層であるオリブ褐色シルト質粘土からは土師器や鉾沓が出土したが、細片のため図化し得たものはなく、このため時期の判別も難しい。しかし、本層が後述の共通教育棟調査区の第3a層に対比できる岩相であり、また本層の遺物が共通教育棟調査区の第3a層の遺物の時期である中世末期～近世前半としても矛盾はないものであるので、本層もこの時期の地層と考えられる。

ii) 第1層出土の遺物

本調査区第1層の作土から、関西系陶器や肥前磁器、土師器などが出土した。このうち土師器のミニチュア羽釜2を図15に図示した。近世末期～近代のものであろう。

4) まとめ

本調査区では、中世後半～近世の鋤溝を検出した。近世の遺構の上を覆う第1層も近代の作土であるので、ここが中世後半から近代まで生産域として利用されていたことがわかった。

第3節 共通教育棟調査区の遺構と遺物

1) 中世後半の遺構と遺物(図16・17・20・21、原色図版1、図版5～9・11・12)

理学部調査区同様に、第5層上面で中世後半(室町時代)の遺構が見つかった。これらの遺構は埋土や出土遺物、遺構どうしの重なり状況から、第4層の遺構と第3b層の遺構、第3a層下面の遺構に分けられる。第4層の遺構には溝・鋤溝・土壌・小穴があり、第3b層上面の遺構は2基の井戸、第3a層の遺構は耕作に係る鋤溝・土壌・小穴などがある。

以下におもな遺構について記述する。

第4層の遺構は、幅が広くて深い大溝と、鋤溝とみられるSD402～404、土壌SK405・406、小穴SP401などがある。

大溝は、幅約3.0m、深さ0.5～0.6mの規模のもので、西調査区西端中央部から東調査区南壁中央部にかけて検出した。底の標高は西端でTP+9.3m、南壁にかかる東端でTP+9.2mで、北西から南東に向かって緩やかに下がっている。層序でも述べたように、大溝は下から順に第4c・4b・4a層で埋まっていた。第4b・4c層(図17の大溝断面図の3・4の地層)は第5層の偽礫を含み、人為的に埋めた土とみられる。したがって、この時点で大溝は完全に機能を終えたものと考えられる。

大溝は東調査区の西端付近で、上端が約1.5mの幅で南に2mほど張り出して、この張出部から

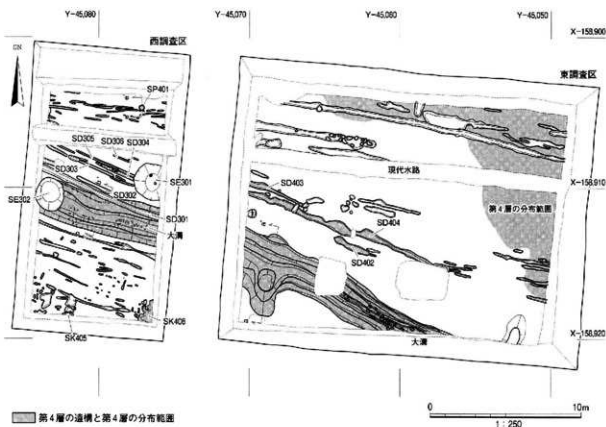
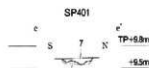


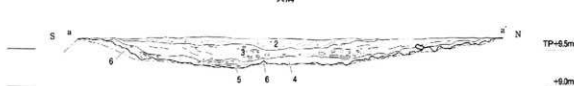
図16 共通教育棟調査区中世後半の遺構

第4層の遺構

大溝



大溝

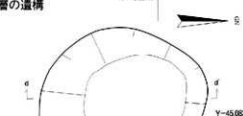


- 第4a層 1: オリーブ褐色(25Y4/4)含細粒砂粘土質シルト(酸化鉄を含む)
 第4b層 2: オリーブ褐色(25Y4/4)含細粒砂粘土質シルト～シルト質粘土(炭・繊維をわずかに含む)
 3: 暗灰黄色(25Y4/2)含細粒砂・粘土シルト質粘土(第5層の偽層を含む)

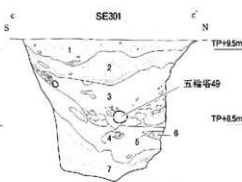
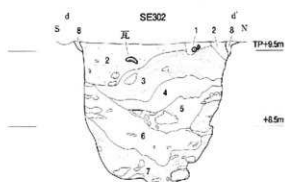
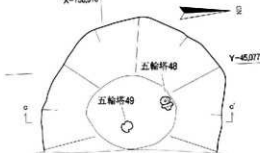
- 第4c層 4: 黒褐色(10YR3/2)～灰黄褐色(10YR5/2)含細粒砂シルト質粘土～粘土(第5層の偽層を含む)
 第5層 5: 黄灰色(25Y4/1)含細粒砂シルト質粘土
 6: 明黄褐色(10YR6/8)シルト質粘土～粘土
 7: 黒褐色(25Y3/2)シルト質粘土(酸化鉄を含む)

第3b層の遺構

X-158910



X-158910



- 1: 黄褐色(25Y3/6)含砂・礫・粘土～砂質シルト
 2: オリーブ褐色(25Y4/3)含砂・礫・炭粘土質シルト(第5層偽層を含む)
 3: 明黄褐色(25Y7/6)含粘土・炭繊維砂
 4: 明黄褐色(10YR6/8)含細粒砂シルト質粘土
 5: 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土(第5層偽層を含む)
 6: 黒褐色(10YR3/1)含砂シルト質粘土(第5層偽層を含む)
 7: 暗灰色(10YR4/1)砂質粘土(第5層偽層を含む)
 8: オリーブ褐色(25Y4/6)シルト質粘土(大溝)

- 1: 灰色(5Y4/1)含砂・礫・炭・酸化鉄粘土質シルト
 2: 灰色(5Y4/1)含砂・炭粘土質シルト(第5層偽層を少し含む)
 3: 灰色(5Y4/1)含砂・粘土シルト質粘土(第5層偽層を含む)
 4: オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土(第5層偽層を含む)
 5: オリーブ黄色(5Y6/3)粘土(第5層偽層を含む)
 6: 青灰色(10BG6/1)含粘土砂質礫
 7: 灰色(10Y6/1)含砂・礫シルト質粘土

0 2m
 1: 50

図17 共通教育棟調査区遺構断面図

流れ込んだとみられる地層が大溝の最下層に観察された(図17の大溝断面図の5の地層)。

西区全域と東区の東端で、大溝の底面に偶蹄類の足跡が観察された。理学部調査区同様にウシと考えられるものである。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器といった中世の土器とともに鉾澤、石包丁が出土した。ほとんどが細片で、図化し得ないものが多いが、西区第4a層から出土した土師器皿15・瓦器皿23と、東区第4c層から出土した石包丁6を図示した。土師器皿15と瓦器皿23は中世後半のもので、この溝の埋まった時期を示す。石包丁6は弥生時代のもので、周辺の古い地層に由来するものと考えられる。

SD402～404は、大溝の北側に大溝と平行して掘られたもので、幅が0.2～0.4m、深さが5cm未満の浅い溝である。埋土は第4a層に似たにぶい黄褐色のシルト質粘土～粘土質シルトで、炭や焼土を含む。これら鋤溝からは遺物は出土しなかった。

土壌はSK405・406が西調査区で見つかり、SK405は東西約0.5m、南北0.5m以上、深さ約20cm、SK406は東西1.0m以上、南北1.5m以上、深さ10cm未満の浅い土壌である。どちらの土壌も上記の鋤溝と同じにぶい黄褐色のシルト質粘土～粘土質シルトで埋っていた。遺物は出土しなかった。

第4層の小穴は西調査区でSP401が見つかった。直径約0.4m、深さ10cmで、埋土は第4層由来の黒褐色シルト質粘土で、鉾澤が出土した。

第3b層の遺構には2基の井戸SE301・302がある。

SE301は東西2.0m以上、南北約2.3mの平面円形の素掘り井戸である。検出面からの深さは1.9mで、底部では直径が1.2mとなる。現状で井戸側などの施設はなく、第5層の偽礫を含むシルト質粘土で埋まっていた(図17)。遺物は土師器・瓦質土器・瓦などの中世後半の土器と、花崗岩製の五輪塔、鍛冶または鋳物師などの金属加工に関連する炉壁や鋳型、鉾澤・鉄片などが出土した。これらのうち、瓦質土器鉢24を図20に、また内面に布目痕跡が残る中世丸瓦44～46と花崗岩製の五輪塔48・49を図21に掲載した。

SE302は西調査区の西端で見つかった平面円形の素掘り井戸で、第4層の大溝の上に掘られている。東西約1.8m、南北約2.0m、検出面からの深さは2.0mで、底部では直径が約1.1mになっていた。SE301同様に井戸側などの施設はなく、第5層の偽礫を含むシルト質粘土で埋まっていた(図17)。遺物は土師器・須恵器、瓦質土器・中世瓦とともに鑪羽口・炉壁・鉾澤といった金属加工関連の遺物、砥石などが出土した。これらのうち、内面に布目の痕跡と外面に縄目タタキの残る中世丸瓦43を図21に、また金属加工に関連する炉壁片を図版12(51～53)に掲載した。SE301と同じ中世後半の井戸である。

第3a層下面の鋤溝は、幅0.2～0.9m、深さ5cmほどのもので、いずれも礫を含む灰黄色砂質シルトで埋まっていた。溝の方向は第4層の鋤溝に比べ、正東西方向に近い一群と、大溝とはほぼ同じ方向のSD301～306などがある。また、西調査区北半部に、理学部調査区で見られたような、一掘りの鋤の痕跡が東西に列をなして並んでいるようす観察された(図版9)。これらも耕作の痕跡であろう。

鋤溝から出土した遺物はあまり多くはないが、大溝の上に重なるSD301から土師器・金属加工関連の羽口・鉾澤が出土し、その北側に平行して掘られたSD302から土師器・須恵器と瓦質土器鉢、鉾澤

が出土した。これらは中世後半のものである。細片のため、図化し得たものはない。

2) 中世末期～近世の遺構(図18、図版10)

第3a層上面で第2bii層下面の鋤溝を検出した。鋤溝は調査区のほぼ全域に分布するが、北西～南東方向のものと東西方向のものとがある。

北西～南東方向の鋤溝は、東区全域と西区の北半部に見られた。ほとんどが痕跡程度しか残っておらず、本来の形状や規模はよくわからないが、東区の南・西部に残るSD201～203だけは、幅0.5～0.8m、深さは10cmほどの溝として計測することができた。これらは砂や礫が混じる暗灰褐色粘土質シルトで埋っていた。

東西方向の鋤溝は上記の北西～南東方向の鋤溝の上に掘られたものである。よく残っているものでも幅0.2m、深さは3cmほどしかない。埋土は細粒砂を含む暗灰黄色粘土である。

またSD201・202の北側に接して、1.6～2.2mの幅で鉄分が沈着する帯状の拡がりが見られた。先に述べた第4層の大溝の北側にも大溝に沿って遺構のない、幅3mほどの帯状部分があるが、ちょうどこの部分の真上にあたり、方向も同じである。第4層の遺構のない部分も、第3a層上面のこの部分も、それぞれ道路の痕跡ではないかと考えられる。

第3a層上面の遺構から出土した遺物はないが、後述する第3層と第2層の遺物が示す時期から判断して、これらの遺構は中世末期～近世のものと考えられる。

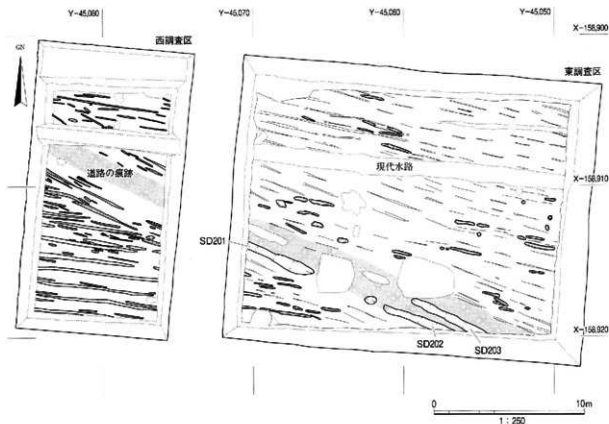


図18 共通教育棟調査区中世末期～近世の遺構

3) 近世末期の遺構と遺物(図19・20、図版10)

第2a層上面で畝と里道を検出した。畝間となる溝は幅0.6～0.8m、深さ0.2mほどで、溝と溝の間隔、つまり畝の幅であるが、広いところで約1.3m、狭いところで約0.6mであった。これら畝と畝間は、全面が第1層の粗い砂で覆われていたため、耕作当時の姿のままで残っていた。畝の作土(第2a層)から19世紀前半までの遺物が出土した。畝の出土遺物のうち、近世の遺物を図20に示した。39～41は肥前磁器で、39・40が碗、41が皿、42が瀬戸美濃焼磁器碗である。これらの遺物が19世紀前代のもので、

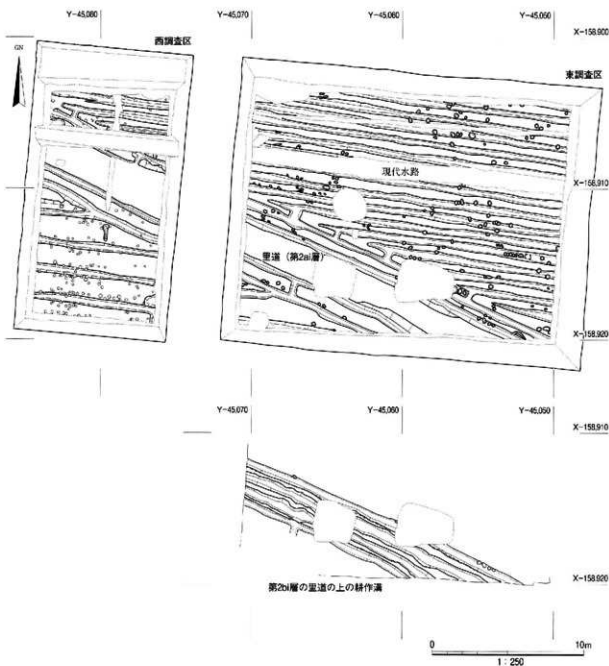


図19 共通教育棟調査区近世末期の遺構

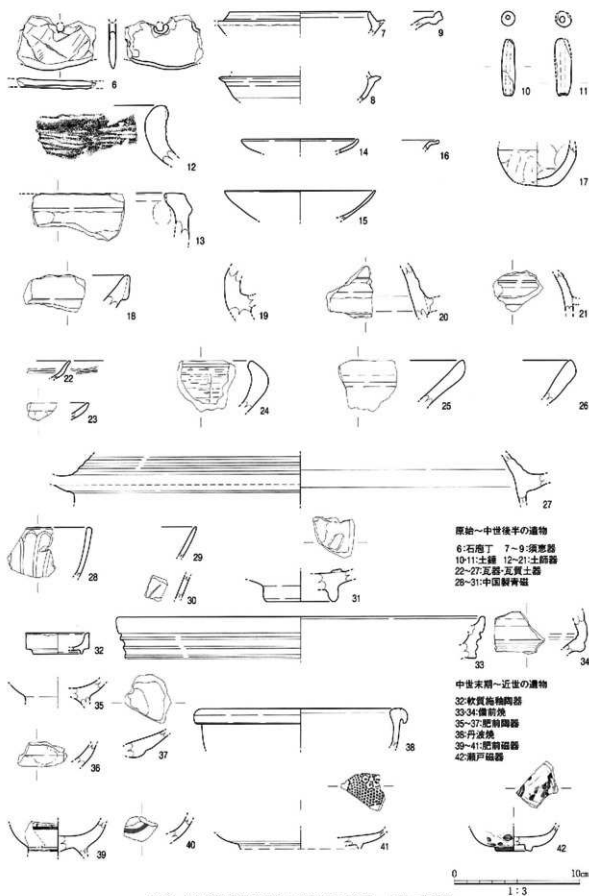


図20 共通教育棟調査区出土遺物(1)石製品・土器・陶磁器

大溝(6・15・23)、第4層(17)、SE301(24)、第3層(7・8・12・13・16・18・22・25・28・31・33・34・37)、
 第2層(9・11・29・30・32・35・36・38～42)

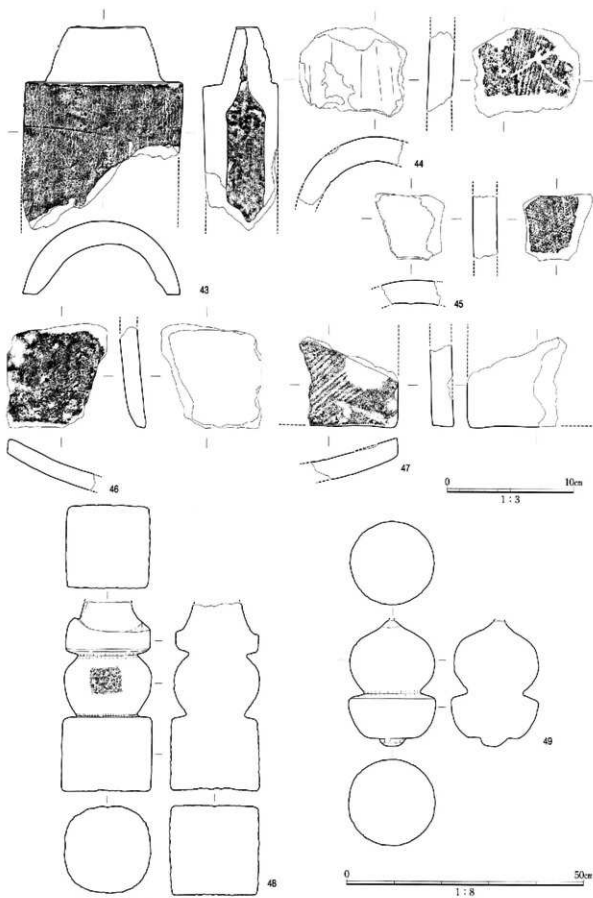


图21 共通教育棟調査区出土遺物(2)瓦・五輪塔
SE301(44~46・48・49)、SE302(43)、第3層(47)

この畚の時期を示す。32は軟質施軸陶器の釜身、35・36は肥前陶器で、35が呉器手碗、36は碗か皿とみられる破片、38は丹波焼甕である。これらは17～18世紀代の江戸時代の遺物である。

里道は幅約2.0mで、第2a層の畚の上に土(第2ai層)を盛って固めたものである。第4層や第3a層の道路痕跡と考えたものとはほぼ同じ方向で、位置もほとんど変わらない。19世紀前半の遺物が第2ai層から出土した。

4)各層出土の遺物(図20・21、図版11・12)

i)第4層の遺物

第4層は共通教育棟調査区の全域には分布していなかったが、東調査区の東北部は比較的残りがよく、ある程度の拡がりをもって分布していた。ここから中世の土師器の甕や碗などが出土したが、いずれも破片で図化し得ないものが多い。図20に土師器手捏ね鉢17を示した。古代～中世のものである。

ii)第3層出土の遺物

須恵器杯身7・8、土師器の甕12・甕13・「て」の字皿16・鉢口縁18、羽釜19～21、瓦器の皿22と鉢25・26、瓦質土器羽釜27、中国製青磁の蓮弁文碗28と高台31、備前焼播鉢33・34、肥前陶器皿37を図20に、中世平瓦47を図21に示した。また、金属加工に関連する炉片50を図版12に掲載した。8が東区の第4層の大溝直上の第3b層から出土し、19・21・26・33が西調査区の第3a層、他はすべて東調査区の第3a層から出土した。須恵器7・8は6世紀代のもので、第3a層の備前焼33・34と肥前陶器37が中世末期の16世紀末頃のものともみられるが、第3a・3b層の遺物の大半が中世後半(室町時代)のものである。したがって第3b層が中世後半、第3a層は中世末頃と考えられる。

iii)第2層出土の遺物

第2層の時期を示す遺物は、上記、3)近世末期の遺構の項で紹介したので、ここでは本層出土の特筆すべき遺物を記す。

須恵器甕9は古代の遺物、土師質土鉢10・11は中世によく使われた漁撈の鉢で、中国産青磁碗口縁29と除刻のある破片30は12～14世紀に流通した輸入品である。これらは第2層の時代のものではないが、より古い時代の生業や交易を示す重要な資料である。

5)まとめ

本調査区では、中世後半の大溝や井戸、中世後半～近世の鋤溝を検出するとともに、金属加工に関連する多くの遺物を検出した。これは理学部調査区と同様に、ここが中世後半から近代まで食物の生産域として利用されていたこと示すとともに、中世後半には金属加工を行う人々の居住域が近辺にあったことを傍証するものである。今までの調査や文献資料によると、本調査区北側と東側には中世に活躍した河内(我孫子)鋳物師の工房や居住域が存在し、今回の生産域は、あるいはこういった人々のものであったのかもしれない。

また、第4層の大溝とその北側にある道路痕跡は土地区画を示す好材料となるもので、この道路が近世を経て、近代まで踏襲されてきたことが、この調査で明らかになったといえよう。

第Ⅳ章 今回の調査のまとめ

今回行った共通教育棟地区と理学部の調査で、中世後半の大溝や井戸、中世後半～近世の鋤溝・畠を検出した。また、中世後半の遺構や地層から、金属加工に関連する多くの遺物も検出した。これは両調査区が中世後半から近代まで食物の生産域として利用されていたこと示すとともに、中世後半には金属加工を行う人々の居住域が近辺にあったことを傍証するものと考えられる。

今回の調査地の北側と東側には、中世に活躍した河内(我孫子)鋤物師の工房や彼らの居住地が存在したことが明らかになっている。今回検出した生産域は、あるいはこういった人々のものであったのかもしれない。

また、共通教育棟調査区第4層の大溝とその北側にある各時代の道路痕跡は、各時期の土地区画を示す好材料であり、近代までこの道路が踏襲されてきたことが、この調査で明らかになった。

こういった区画は、本調査で検出された生産域や近辺にある居住域と密接にかかわりのあるものと考えられ、周辺の調査や今後の調査成果を含めて検討することで、より具体的な歴史景観を復元できるものと考えられる。

さらに、現在までに行われた山之内遺跡の調査で見つかっている弥生時代や古墳時代の遺構は、今回の調査では検出されなかったが、出土遺物の中にそれらの時代のものがあることから、本調査地近辺には確実に当該期の遺跡があったことが窺える。

今後の調査成果を含め、さらなる検討を行いたい。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.127-138
- 1992、『平成3年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.71-78
- 1993、『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp.145-155
- 2006、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』pp.281-290
- 大阪市文化財協会1998、『山之内遺跡発掘調査報告』
- 1999、『山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ 付篇 遠里小野遺跡
- 2002、『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書-1999・2000年度-』pp.17-20
- 2008a、『菊田4丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2008b、『住吉区杉本二丁目における建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM08-2)報告書』
- 2010、『山之内遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
- 2011、『山之内遺跡発掘調査報告書』Ⅳ
- 大阪市立大学考古学研究会1982、『第五章 古環境の復元』:『史叢』第6号、pp.49-64
- 小倉博之・吉川周作・此松昌彦・木谷幹一・三田村宗樹・石井久夫1992、『大阪府、上町台地南部の台地構成層と地形面の形成期』:『第四紀研究』31、pp.179-185
- 建設省国土地理院1965、『土地条件図』大阪西南部・大阪東南部
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 式内社研究会1977、『式内社調査報告』、皇学館大学出版部
- 中九兵衛2004、『甚兵衛と大和川』大阪書籍株式会社
- 長山雅一1997、『第一編 第三章 第一節 考古資料による古代の漁業』:大阪府漁業史編さん協議会編『大阪府漁業史』、pp.52-57
- 文化庁文化財部記念物課2010、『土層の認識と表土・包含層の発掘』:『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』、pp.93-116
- 真野修1989、『原始古代の飯桶壺縄漁の検討』:神戸古代史研究会編『神戸古代史』No.8、pp.1-10
- 山崎隆三1962、大阪市立依羅小学校創立八十五周年記念事業委員会編『依羅郷土史』

**The Excavation Report
of
the Yamanouchi Site in Osaka, Japan**

Volume V

A report of an excavation
prior to the development of
Osaka city university in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgement

Chapter I Geographical background and Historical transition..... 1

S.1 Geographical Background

S.2 Previous Investigations

Chapter II Background and Progress of Research 1

Chapter III Investigation Results.....7

S.1 Stratigraphy

S.2 Features and artifacts from the research area in the Faculty of science

1) Features and artifacts of the Later Medieval period

2) Features and artifacts from the Final phase of the Medieval period to the Early Modern period

3) Artifacts from each stratum

4) Conclusion

S.3 Features and artifacts from the research area in the General education building

1) Features and artifacts of the Later Medieval period

2) Features and artifacts from the Final phase of the Medieval period to the Early Modern period

3) Features and artifacts of the Final phase of the Early Modern period

4) Artifacts from each stratum

5) Conclusion

Chapter IV Conclusion 13

References and Bibliography 18

English Contents

報 告 書 抄 錄

ふりがな	やまのうちいせきはつくつちようさほうこく							
書名	山之内遺跡発掘調査報告Ⅴ							
編著者名	松本啓子							
編集機関	財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまのうち 山之内遺跡	やまのうちいせきはつくつち 大阪府住吉区 杉本3丁目	市町村	道路番号	34° 35′ 37″	135° 30′ 31″	20100529 ～ 20100902	780㎡	大阪市立大学理 系学会整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
山之内遺跡	集落	中世後半		大溝		土器・陶磁器・炉片		
		中世後半～近世		鋤溝		瓦・土器・陶磁器		
		近世末期		畠・里道		瓦・陶磁器		
本書は、2010年度に大阪市立大学構内の全学共通教育棟地区と理学部地区の2箇所に おいて実施した発掘調査の成果を報告するものである。 今回の調査では、中世後半の大溝や井戸のほか、中世後半～近世の鋤溝・畠を検出し た。同調査区が中世後半から近代まで耕作地として利用されていたことは明らかである。 一方、中世後半の遺構や地層からは、炉片などの金属加工に関連する多くの遺物が出土 したことから、当該期には河内(我孫子)銅物師に係わる人々の居住域が近辺にあった可 能性が高い。 また、全学共通教育棟調査区の大溝とその北側にある各時代の道路痕跡は、近代まで この道路が踏襲されてきたことを示す資料である。こうした土地区画は、今回の調査で 検出された耕作地や近辺にある居住域と密接にかかわりのあるものと考えられ、周辺の 調査や今後の調査成果を含めて検討することで、より具体的な歴史景観を復元できるも のと考えられる。 さらに、出土遺物のなかには、これまで山之内遺跡の調査で見つかった弥生時代 や古墳時代のものが含まれており、今回の調査地近辺にも確実に当該期の遺跡があった ことを窺わせる。								

原 色 図 版

東調査区
東壁断面
(西から)



東調査区
中世後半の遺構
(西から)



西調査区
中世後半の遺構
(南西から)



圖 版

第5層上面全景
(東から)



第5層上面全景
(西から)



第5層上面の遺構
(東から・東半)





東壁断面
(西から)



南壁断面
(北から)



深掘り断面
(北から)

第5層上面の遺構
(西から・西半)



第5層上面の
鋤痕跡と足跡
(南から)



第5層上面の
偶蹄目の足跡





第3層上面の遺構
(北から・西半)



SK202
(北から)



SK201
(北から)

西調査区
第3層と第4層の遺構
(北から)



西調査区 SE302断面
(東から：上部)



西調査区 SE302断面
(東から：下部)





西調査区 SE301
(東から)



西調査区 SE301
五輪塔49出土状況
(東から)



西調査区 SE301
五輪塔48出土状況
(東から)

東調査区 大溝
(北西から)



東調査区 大溝断面
(南東から)



東調査区
南壁にかかる大溝
(北西から)





西調査区
大溝・井戸検出状況
(北から)



西調査区 大溝断面
(東から)



西調査区 大溝と井戸
(北から)

西調査区
大溝の底に残る足跡
(西から)



西調査区 鋤痕跡
(北から)



西調査区 SP401
(東から)

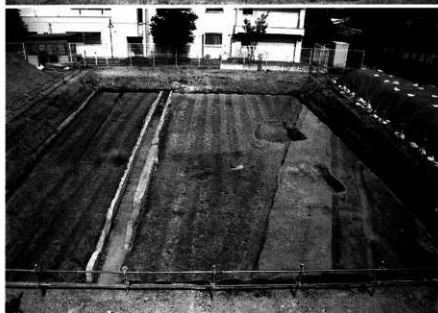




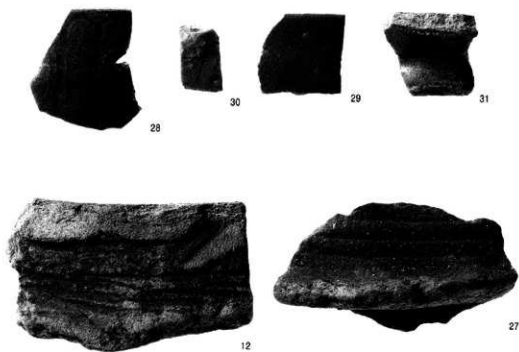
東調査区
第3層上面全景
(西から)



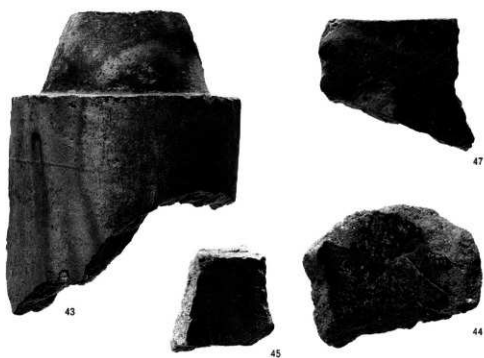
西調査区
第3層上面全景
(北から)



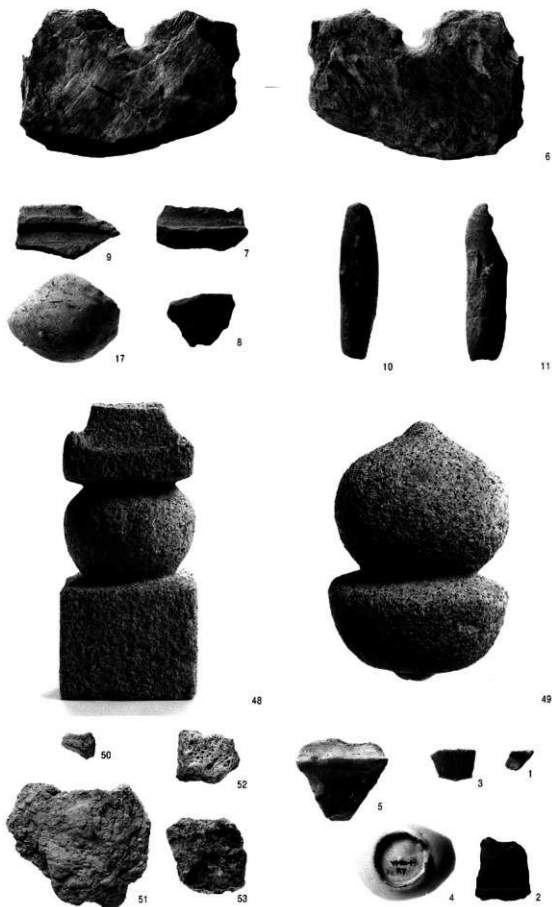
東調査区
第2層上面全景
(西から)



第3層(12・27・28・31)、第2層(29・30)



SE301(44・45)、SE302(43)、第3a層(47)



共通教育棟調査区：大溝(6)、第4層(17)、SE301(48・49)、SE302(51~53)、第3層(7・8・50)、第2層(9~11)、理学部調査区：SK403(5)、SD408(1)、第1層落ち込み(3・4)、第1層(2)

大阪市住吉区 山之内遺跡発掘調査報告 V

ISBN 978-4-86305-083-9

2012年3月30日 発行◎

編集・発行 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

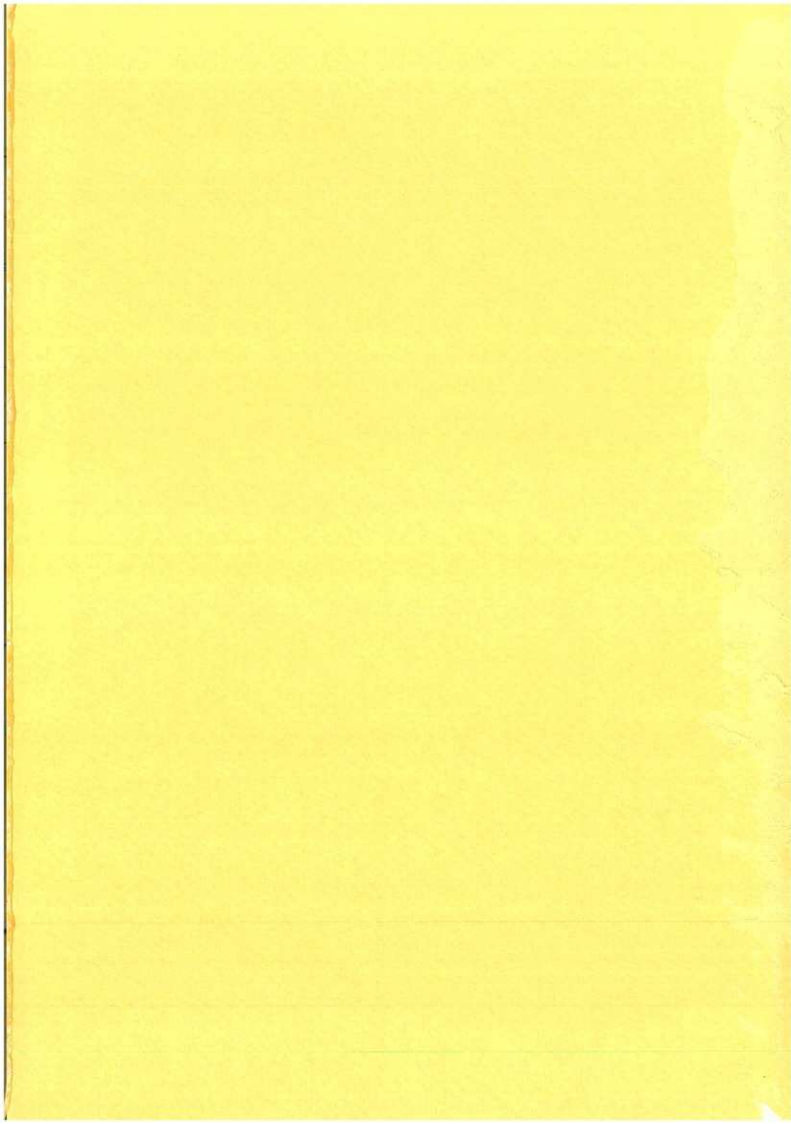
公立大学法人 大阪市立大学

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

(TEL.06-6605-2061 FAX.06-6605-3110)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8



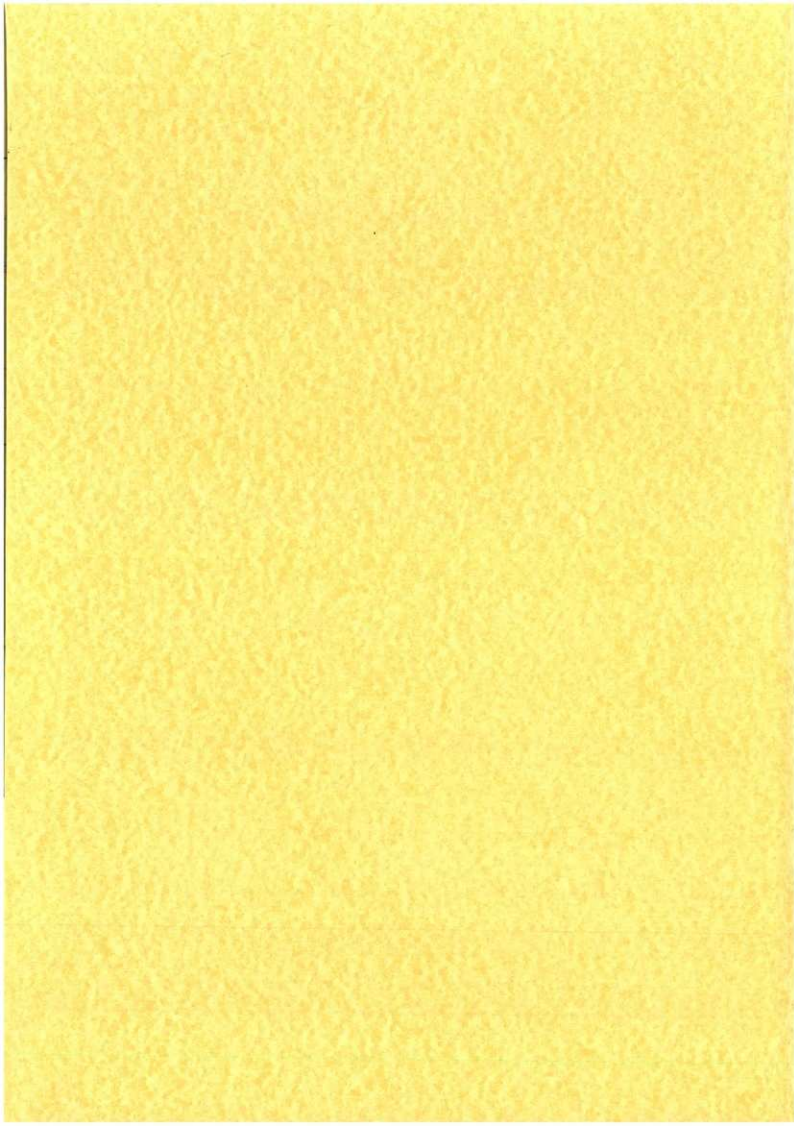
**The Excavation Report
of
the Yamanouchi Site in Osaka, Japan**

Volume V

A report of an excavation
prior to the development of
Osaka city university in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association



**The Excavation Report
of
the Yamanouchi Site in Osaka, Japan**

Volume V

A report of an excavation
prior to the development of
Osaka city university in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association